

した。吉十郎の頭の中に、幕内まくのうちの村のすがたが、大きくひろがって、たいへんだなあ、と思いました。しかし、心の中は燃えてくるようでした。

何年かが過ぎました。吉十郎は、名を与次右衛門よじえもんとあらためました。

佐瀬家させけには、五町歩ちやうぽ（五ヘクタール）もある広い土地があり、十三人の家族のほかに、何人かの作男さくむとこもいました。村一番の広い田畑をたがやすために、与次右衛門は、いつも皆の先頭になって働きました。

肝煎の仕事にも、だんだん慣れてきました。しかし、いつも頭を痛めるのは水です。大雨が続くと、洪水が心配でした。村の人といっしょに、堤防を作るのですが、大水はこれを簡単にこわしてしまいます。

雨がやみ、水がひくと、広い石の川原かわらがあらわれ、水は川床かわどこの片すみを流れるだけになってしまいます。こんどは、水が足りなくなります。川のそばの村